

3/11反原発福島行動へ!

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

2018年1月18日
No.502

Tel 03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

1/16国賠第4回口頭弁論報告!

1月16日、東京地裁民事第31部(小野寺真也裁判長)で、一昨年9月の全学連大会での公安警察による学生襲撃に対する国家賠償請求訴訟・第4回口頭弁論が行われました。

大会当日に会場前で警視庁公安部の刑事たちが撮影した大量の写真と動画(学生への殴る蹴るの暴行が克明におさめられている)を法廷に提出しようとしないうこと——これが現在の裁判の最大の焦点です。

被告である公安警察と東京都は、動画・写真の存在を認めつつも、証拠としての提出をかたくなに拒んでいます。自らにとって「やましい」事実が写っていることを半ば認めているのです。しかもあろうことか、「第三者が写っていてプライバシーの問題があるから」や「刑事告訴された時の証拠になってしまうから」など、提出拒否の理由にもならない「理由」を並べ立てているのです。国家による権力犯罪の露骨な隠ぺいであり、まったく破産しています。法廷では、被告が裁判長から「裁判の円滑な進行のために(動画・写真の)提出をお願いします」と促される始末です。

書面確認に続いて、原告の仲井祐二君が意見陳述に立ち、「被告を追い詰めているのは私たちです。真っ向から国家権力・公安警察の弾圧に対して対決する中で勝利が切り開かれます。国家権力との対決を恐れて、戦争・弾圧など止められません。闘う中に勝利の展望があります」「本裁判に多くの労働者民衆が注目しています。裁判所は真実を明らかにする立場に立つのか、公安警察と結託して真実を隠ぺいし、弾圧を『正当化』する立場に立つのか!」と鋭く裁判長に迫りました。



裁判後の総括集会(写真)でも、弁護団や動労水戸・辻川慎一副委員長、初傍聴の学生から活発な意見が出され、さらに多くの傍聴者を集めることで公安警察を追い込んでいこうと確認されました。次回の口頭弁論は3月22日(午後3時開廷)です。裁判の傍聴にぜひ集まってください! (全学連・A)

原告・仲井祐二君の意見陳述

(1)公安警察は今すぐ証拠動画・画像をすべて開示しろ!
本裁判闘争の現局面は、公安警察の証拠ビデオの提出か否かの重要な局面に入っています。公安警察は現場を撮影した動画・画像データを所持していることを認めながら「法廷には提出しない」と一貫して提出を拒否しています。彼ら公安警察は、本裁判で争っている全学連大会への襲撃を「捜査の一環だ」と開きなおっています。であるならば、公安警察は動画・画像データを全部提出して殴る・蹴る・衣服を破る、罵詈雑言を浴びせかけるなどの暴力的襲撃を全く正当だと言い切れば良いではないでしょうか。戦争に反対する学生を弾圧するのは

福島から改憲・戦争を止めよう

原発・オリンピックを打ち砕こう

3.11反原発福島行動'18

〈日時〉 3月11日(日)13時~ ※12時開場 ※15時デモ出発

〈場所〉 郡山市民文化センター・大ホール

〈呼びかけ〉 3・11反原発福島行動実行委員会

〈メール〉 3.11fukushimaaction@gmail.com



正当だと言い切れば良いではないでしょうか。何十人と公安警察を動員し、労働者の税金を投入して行った「捜査」を、「今後の捜査にも支障をきたす恐れがある」「告訴に影響する」と言って動画・画像提出を拒んでいます。こんなものは法的にも社会通念上でも全く通用しません。そもそも証拠も出さずに争うことに何の意味があるのでしょうか？ 歴史的にも証拠の隠蔽と冤罪は一体のものでした。そこにあるのは、国家と公安警察の犯罪を隠蔽したいという意図だけです。告訴においても、検討が始まってから1年が経過し、完全に棚上げされています。証拠の隠蔽と受理の棚上げ！ 本当にふざけきっています。

本裁判で追い詰めているのは私たちです。真っ向から国家権力・公安警察の弾圧に対して対決する中で勝利が切り開かれます。国家権力との対決を恐れて、戦争・弾圧など止められません。闘う中に勝利の展望があります。

また同時に、裁判所も公安警察か労働者民衆のどちらの立場に立つのかということが鮮明に突きつけられています。私たちは、告訴・国賠ニュースとして『権力を告発する！』を多くの労働者・学生、また裁判所・地検前でも配布し、本裁判への注目を訴えてきました。ネットで公開されている公安警察の襲撃動画は、再生回数からもわかるように多くの労働者民衆が注目しています。裁判所は真実を明らかにする立場に立つのか、公安警察と結託して真実を隠蔽し、弾圧を「正当化」する立場に立つのかとうことです。

(2) 本裁判を改憲・朝鮮戦争阻止闘争として闘う

2018年は、改憲・朝鮮侵略戦争との対決の年です。「米の北攻撃 3月18日以降」「武力行使条件整っている」(1月1日付産経新聞)と報じられています。またトランプと親密な対北朝鮮強硬派で知られる米上院議員グラム(共和党)は、雑誌のインタビューで「トランプ政権が北朝鮮への攻撃に踏み切れば『ピンポイント攻撃』ではなく『全面戦争』になる。東アジアの数百万人の命が犠牲になる」(17年12月3日)と答えています。

私たちは、本裁判を改憲・朝鮮侵略戦争阻止の重要な一環として闘い抜きます。過去の日本の侵略戦争の歴史を見るまでもなく、戦争と労働者民衆への政治弾圧は一体です。現代においても71年11月14日に沖縄返還批准阻止の渋谷暴動闘争を闘った大坂正明さんへの殺人罪でつち上げの逮捕をはじめ、私たちの仲間が去年の11～12月だけで10人不当逮捕されています。絶対に許すことのできない反戦運動への政治弾圧です。

しかし、戦争と共謀罪成立情勢下でのこれらの弾圧の意図は全く貫徹されていないどころか、安倍政権への怒りがますます高まっています。1月15日発表の共同通信の世論調査では、安倍政権下での改憲に反対は54.8%(賛成は33%)です。しかもこれは2017年12月の前回調査から6.2%増加しています。安倍政権による北朝鮮への排外主義やオリンピックや天

皇制を使った運動への圧殺があった中でもです。戦後一貫してきた戦争反対の労働者の意志は絶対につぶされないということです。同時に、私たちのこの間の弾圧粉碎、仲間の奪還の闘いは公安警察と真っ向対決し、完全黙秘・非転向で闘えばどんな弾圧も跳ね返せることを示しています。この切り開いてきた地平は本当に重要です。

(3) 全学連大会への襲撃とは何か？

そもそも公安警察による全学連襲撃とは何だったのでしょうか？ 16年9月の全学連の大会で、公安警察が殴る・蹴る・衣服を破るなどの暴力的襲撃を行ってきた事件です。なぜ、公安警察は暴力的襲撃を行ってきたのでしょうか？ それは、15年の安保法制＝戦争法反対闘争に対して、全学連が労働者人民の最先頭で闘い、また10月に京大の反戦バリケードストライキを闘い、常に戦争を止める展望を示して来たからです。

この間、日本共産党は原発、安保法、天皇制に屈服し、シールズも解散、連合も崩壊的情勢に入りました。あらゆる勢力が改憲と朝鮮侵略戦争情勢の中で屈服しています。戦争はあらゆるものをふるいにかけています。国家権力もよく見えています。結局、この情勢下で逮捕を恐れず、人生をかけて戦争に一貫して反対したのは全学連だったということです。だからこそ全学連への政治的暴力的襲撃だったということです。

過去の侵略戦争は、戦争に反対する労働運動・学生運動の大弾圧を行わずして遂行することはできませんでした。まさに本裁判はこの戦争と弾圧に真っ向から対決する闘いとして、攻めの改憲・朝鮮侵略戦争阻止の闘いとして断固闘い抜きます。本裁判の前進と勝利は、改憲・朝鮮戦争阻止の闘い、そして国家権力の弾圧を粉碎し、労働者運動、学生運動をさらに発展させる極めて重要な闘いです。

(4) 改憲・朝鮮侵略戦争を阻止する2018年決戦へ

私たちは、裁判所に一切の幻想を持ちません。改憲と朝鮮侵略戦争を止める闘いは、法律や理念にあるものではありません。朝鮮侵略戦争を止める力は国境を越えた韓国民主労総との団結であり、米国での国際港湾倉庫労働組合(ILWU)などの労働組合との国際連帯の力の中にあります。社会の生産・管理を担う労働者の団結とストライキが具体的な戦争を止める力です。私たち全学連は本裁判とともにこの日本において、動労千葉などの労働組合とともに、公安警察の弾圧を粉碎し、学生運動において戦争を止める団結を作っていくだけです。

1月22日には、18年の通常国会が始まります。改憲・朝鮮侵略戦争阻止闘争の本格的闘いです。私たち全学連は22日(月)、正午より参議院議員会館前で改憲・朝鮮侵略戦争阻止の国会前集会を行います。私たちは18年、巨大な学生運動を爆発させる決意です。私もその先頭に立つことを決意として意見陳述とします。(以上)

1・22通常国会開会日弾劾行動

1月22日(月)12～13時 / 永田町・参議院議員会館前

呼びかけ：全学連

※「全学連」の青い旗が目印です。